男女平等推進 from むさしの

生き方・いろいろ・ゆたかな人生

まなこ

115
NOV. 2022

『男らしさ』『自分らしさ』

男らしさの鎧にさよなら ―清田隆之さん …… P.2

市民インタビュー
ありのままの自分で飛び込んでみよう …… P.5
パイオニアがいるから僕がいる …… P.6

企画 発行 武蔵野市 市民部 市民活動推進課 男女平等推進センター

特集

「男らしさ」「自分らしさ」

6～7月に開催された武蔵野市男女共同参画フォーラム2022「男女平等とサステナブルな社会―知識と意識をアップデート」で、講師に清田隆之さんをお招きしました。

男らしさの鎧にさよなら

鎧を脱いでみたら結構良かった。―「俺たち」から「私」という個人を生きる生き方にシフトした清田さんの講座の様子をまとめました。

僕は中高の6年間男子校でしたが、大学は男子が少数派の学部に入り、正反対の環境になりました。「男子的にはどう思う?」などと恋愛の悩み相談を受けたり、愚痴を聞いたりするようになり、今の活動につながっています。相談の内容は失恋体験や恋愛の悩みから、職場や婚活、結婚生活の悩みまで聞くようになりました。20年以上そのような活動を続けていて、新聞や雑誌に原稿を書いたり、ラジオ番組で話したりもしています。

最近は男性からも増えていますが、圧倒的に女性からの相談が多いです。その内容は、身近な男性が小さな面倒を押し付けてくる、何かと恋愛的な文脈で受け取る、決断を先延ばしする。その他、男同士の関係になると人柄が変わる、謝らない、プライドが高いなど些細な話が多いです。不思議なことに、別々の男性で、年代や属性・出身地・仕事・性格も、全部バラバラなはずなのに、判で押したような、そっくりな行動をとるのです。これは何かこういうものを生み出す背景や理由があるのだろうという気持ちになり、男性の習性を20個のテーマに分類しました。

ジェンダーをめぐる男性の現在地を知る

いままで女性の生きづらさ、社会構造の不平等、ジェンダーギャップなど女性が不利益を被っていることを是正する議論が中心でした。男性も同様に、息苦しさ・生きづらさを抱えていてしんどいと議論が盛り上がり、2014年くらいに新聞・雑誌で特集が組まれるようになってきました。特権があるのに、つらいというのはずるいのではないかと批判もあります。その一方で、男性の働き方は主に長時間労働で、弱音を吐かず走り続けないといけないプレッシャーがある。男性であるが故に抱えてしまう問題もあります。そのため、さまざまな視点で男性学が研究されるようになってきました。

社会が想定する普通のライフコースに違和感なく乗っかれているような多数派（＝マジョリティ）の男性は、生まれた性の違いで被る不利益や特殊な状況について、ほとんど考えることもなく、すくすくと育ってしまった。そういう人たちがいろんなジェンダーの問題の抑圧者や加害者になってしまっている側面があるのではないか。被害者性と加害者性を両方持った男性の現状を踏まえた上で、これからどうしていけばいいのかを考えていければと思います。

清田隆之（きよた たかゆき）さん

文筆家

恋バナ収集ユニット「桃山商事」代表

「恋愛とジェンダー」をテーマに幅広いメディアに寄稿。著書に『自慢話でも武勇伝でもない「一般男性」の話から見えた生きづらさと男らしさのこと』（扶桑社）、『さよなら、俺たち』（スタンド・ブックス）など

doing と being

僕が大学の恩師から教わった「人間」という意味を表わす2つの言葉があります。否定したくても存在しているその人の身体、感情、その人が持っている固有の歴史や価値観などを表す「ヒューマン・ビーイング（human being）」。対して、肩書き、能力、ステータス、年収など社会的なものを表す「ヒューマン・ドゥーイング（human doing）」。

僕もヒューマン・ドゥーイングばかり考える傾向はありましたし、社会的にもそこが優秀か否かを見ています。他者から認められるように能力を磨いたり、資格を取得することばかり考えて、自分の感情や感覚・生理的な反応・価値観・身体性、そういうものは全部無駄なもの、意味のないものと考えてしまう。これは男性に、より顕著な傾向なのかなと個人的には感じています。

また、男性の相談を聞く中で、子どもの頃、男友達に変なあだ名をつけられた、ふざけて女子トイレに入らされたという話を聞きます。大人になっても、わざと知らない話を振られ会話についていけないことを馬鹿にされたなど、嫌な思いをした話がよく出てくるのです。でもその時は、自分は苦しかった、つらかったという感情（＝being）の部分には無自覚で、ネタ話とか、ノリや友達同士のじゃれあいだと笑い話にしていたが、やっぱり今思い出すと嫌だったと、多くの男性が語っていました。他人が同じようなことに遭（あ）っていると「俺は耐えているのに、それくらいで大騒ぎするなよ」と感じ、「嫌だ、やめろ」と訴えている人が腹立たしく、ずるく見えてしまうこともあるようです。そういう気持ちが巡り巡って、相手を抑圧する考えにつながってしまう。そんな単純な構造では無いと思いますが、そういう側面はあると思います。

7月3日 講座の様子

安心して自分語りができる空間で、感情の言語化を

不倫や浮気をされてしまった男性たちにインタビューしたとき、「浮気ってルール違反ですよね。ダメですよね」と答え、辛い、悔しい、腹が立ったなどの感情面が出てこないのです。自分の感情を言葉にするところを耕していけるといいなと思います。

感情というのは、必ず、言葉より先行して身体反応として感じるらしいです。おなかがキュっとする、鳥肌が立つ、動悸がするなどの状態と、しっくりくる言葉を組み合わせることができて初めて、感情の言語化が成立するらしいのです。男性はこれが苦手な傾向にあると感じます。

以前、男性限定で「ヒューマン・ビーイングとしての自分を語る会」というのを主宰しました。初対面の10代から70代の参加者が、相手の話に口を挟まず黙って聞くなどのルール設定をして行ったところ、とても盛り上がりました。ルールがなければ、「弊社はこうこう」とかdoingな面で話してしまうと思います。

オンラインや対面で、友人でも趣味やサークルでも、安心して自分語りができる空間。ひとりで本を読むでもいいと思いますが、考える時間や空間は必要だと感じました。

社会とどう関わっていくか

講座のテーマは「男らしさの鎧にさよなら」ですが、鎧は自分を守るものでもあると同時におもりになり、しんどさも感じます。女性からすればさっさと脱げばいいと感じ、男性からすれば身につけている自覚がないかもしれない。

doとかbeとか便宜上、二分法的にお話しましたが、どっちがいいのかではなく、厳密に分かれるものでもなく、むしろ全部有機的につながっているのが実態だと思います。doingもbeingも同じ人の一面で、doingの部分が鎧だとするとbeingが素のままの自分。だから鎧を脱ぐのではなく溶けていくという言葉がしっくりくるかもしれません。

ヒューマン・ビーイングの側面で、社会の最小単位としての自分を基点にしてみると他者との関わりやつながりが見えてくる。そうすると社会の問題に関心がどんどん広がっていくのではないでしょうか。

［取材　久富朋美　藤田和寿子／取材・文　島崎理恵］

講座後お話を聞いて

清田さんの講座には、若い世代や男性も多く参加していました。講座の後「女性の研究者がたくさんいる中で、私がこうして講演や執筆の機会をいただけるのは、ジェンダーを語る男性が珍しいからで、極めて特権的だと正直思います」と語っていた清田さん。

「『男らしさ』が更新されている。一見マッチョというタイプでない男性の中にも、社会的にこうあるべきということにとらわれ、外部に正解を求めている人がいる」といったお話は、ジェンダーの問題を身近なものとして気付かせてくれるものでした。

講座での質疑応答より一部ご紹介します。

Q. 教育の場で、「らしさ」について学ぶ場があったらよいと思いませんか？

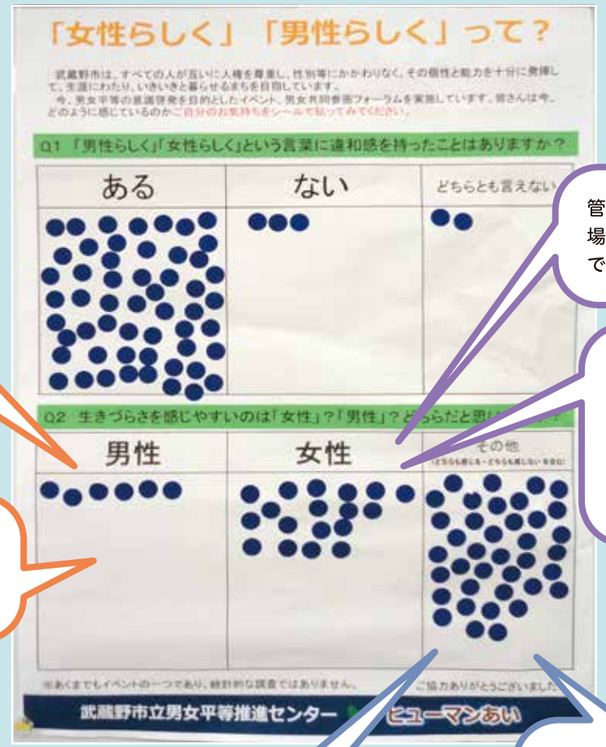
A. 自分自身は学校などでジェンダー教育を受けた記憶はありません。テレビや学校、親などから知らず知らずのうちにイメージが刷り込まれていたと思います。それらを知れたら良かったと思う一方で、中高生の時に聞いても、自分とは関係ないとスルーしていた気がするので、教育だけでカバーできることではないかもしれません。ただ、性教育は必要だと思います。科学的知識、身体のメカニズムを知った上で、自分のことも相手のことも思いやれたらと思います。

Q. 相談を受けるときのコツを教えてください。

A. 僕たちの活動は最初、悩んでいる女友達の話を聞くことから始まりました。変なアドバイスをして嫌な思いをさせたり、怒られたりしていく中で、まずは話している内容を論理的に理解することが大事だと痛感しました。「相手の現在地を共有する」…今、その人が立っている場所、感じている思い、話している内容を言葉通り一旦理解する。「hear＝聞こえている」だけではだめで、「listen＝意識を向けて能動的に聞き」ながらも、口はできるだけ挟まず、言葉通りに理解する。こういうことができたらいいなと思っています。

「女性らしく」「男性らしく」って？

男女共同参画フォーラム 2022 期間中、市役所、講座会場等でアンケートを行いました。
インタビューに答えてくださった市民の方からは、さまざまなご意見が挙がりました。



生きづらさを感じやすいのは「男性」だと思う

支配欲・承認欲求がある男性は、それがプレッシャーとなっているのではないか。

マイノリティーの男性が身近にいて大変なのを見ているから。

生きづらさを感じやすいのは「女性」だと思う

管理職や政治家など意思決定の場で男性が多く、さまざまな面で女性は大変だろうと思う。

私の親は昔の人だから、「家族のことを第一に考えなさい、家族に迷惑かけないようにしなさい」と言われていた。

その他

女性は不利益を被っていると思う。男性は、男性の枠組みからはみ出しにくい。それぞれ大変だと思う。

一概にどちらが生きづらいとは言えない。

「男らしさ」「自分らしさ」をめぐって、世代の異なる2人の市民の方にインタビューしました。

ありのままの自分で飛び込んでみよう

■「お父さんお帰りなさいパーティ」の活動について

定年前後の皆さんが地域で生き生きと活動するのを応援する「お父さんお帰りなさいパーティ」（通称：おとば）の実行委員長をしています。毎年6月に開かれる「おとば」では、地域の活動団体の紹介や、地域活動にまつわる講演、参加者同士の交流会などをしています。その他の月には「おとばサロン」を開催し、お役立ち情報を紹介したり、ゲームや落語観賞などを通し、仲間づくりや地域活動への参加の足掛かりとなるようなものを企画・運営しています。名前に「お父さん」とついていますが、女性の参加も大歓迎。地域活動を始めたい方の後押しをする活動です。

「おとば」に参加したきっかけは、定年を控えて、今まで仕事をしていた時間が空いてしまうので、これまでとは違う世界で何かやりたいなと思っていたところに、情報を見つけたことです。声をかけてもらって、面白そうだったので実行委員になりました。

田中邦忠（たなか くにただ）さん

■男らしさはあまり意識しません

男性はあまり集団に馴染めないなどと言われますが、自分は特に問題なく溶け込めたのではないかと思います。その場の雰囲気に自分を合わせてゆくことを重視しています。

男らしいというのはどういうことか考えると難しいですが、私は、速く走れないし、車の運転もしないし、男らしいとされる基準からは外れているので、男という看板をあまり意識できません。小さい頃から男の友達と一緒に遊ぶことが少なく、男とはこういうものだという刷り込みが少なかったことも影響しているのかもしれません。

男だから家計を支えなくては、というプレッシャーもあまり感じたことがありません。家族が平穏で子どもたちもやりたいことができるように収入を得ようと思っていましたが、それは自分で決めた家族への一方的な約束です。自分で決めた生き方であり、自分で決めた約束を守らなくてはと思っていたのであって、誰かに強要されたわけではありません。男だからやらなきゃ、とは思ったことがなくて、自分がどうしたいのかを大切にしてきました。男とか女の以前に、人間があり、自分があるのだと思います。

男らしさというのは、鎧というよりつっかえ棒のような、何か崩れてしまいそうなものを支えているものというイメージがあります。崩れてしまいそうなプライドをかろうじて支えているものなのかもしれません。

■定年を迎える方に向けて

いろいろな考え方があると思いますが、定年退職してからの生き方は、ありのままの自分で生きるというのがベースではないかと思います。飾り立てて生きていく世界ではなく、素の状態で生きていく必要があります。言い方を変えると、自分の過去を捨て去るのが大事ではないかと思うんです。過去の経験や体験、考えを引きずらず、違う意見を聞いて、そこから学び取っていかないと独りよがりになってしまいます。残念なことに、歳を取るとどんどん視野が狭くなっていってしまうので、気をつけないと、と思っています。

定年後は、失敗しても失うものがないので、思い切って行動していくといいのではないでしょうか。現役の頃は仕事への影響などを考えてしまいますが、定年後はそれがない。初めて参加するときには躊躇（ちゅうちょ）してしまうかもしれませんが、思い切ってやってみれば楽しい世界が広がるように思います。

［取材　羽柴吏美／取材・文　若林優香］

2022年6月「おとば」の様子

パイオニアがいるから僕がいる

清水裕介（しみず ゆうすけ）さん

■育休を取得できる環境があるんだから

僕は都内の私立中高一貫校で教員をしています。今の職場の労働環境は比較的恵まれている方なのですが、それでも自分が育休を取得するのは難しいだろうと思っていました。男性教員だからということもありますし、学年の途中で担当している授業を交代することも、生徒たちを放り出しているようで後ろめたい気持ちがありました。

それでも育休を取得しようと決意できたのは、パートナーの後押しがあったからです。僕が育休取得に踏み切れずにいたとき「自分たちの利益のためだけでなく、社会が変わっていくためにも育休を取得できる環境がある人はどんどん動いていくべきだよ」と言ってくれました。パートナーのこの言葉がなければ、僕は動いていなかったと思います。そして、職場とさまざまに調整を行い、休暇制度を複数利用して、結果的には四ヶ月間育児に専念することができました。また現在は、職場の時短勤務制度を利用して保育園の送り迎えも僕が行っています。

インタビューに答える清水さん

■子どもを産み、育てるということ

僕たちは結婚してしばらく子どもを授かることができませんでした。それでも二人とも子どもが好きなので里親や特別養子縁組も考えていましたが、不妊治療をして二年後に子どもができました。決して安い費用ではありませんでしたが、僕もパートナーも社会人を数年経験して貯金もあったため工面することができました。

子どもを持つという選択ができる人は、とても恵まれていると僕は考えます。正規雇用か、貯蓄はあるか、職場は働きやすいか…これらの事情で子どもを持てるかどうかが決まってくる。働き始めて間もない頃、若い同年代では非正規雇用の教員が多く、彼らと話すと将来についての不安を常に抱えていたように思います。

■だから、僕は動く、発信する

子どもを持つという一つの大事な選択肢が、就業環境や経済状況によって左右されてしまう社会には疑問を感じます。だからこそ、比較的恵まれている環境にいる僕が積極的に育休を取り、育児に関わり、発信していくことが重要だと思うのです。「境おやこひろば」のような地域の子育てコミュニティに参加することも、『まなこ』のような情報誌に自身の経験を伝えていくことも、重要なことだと思います。

僕が自分自身でも積極的に動き発信していこうと思った契機として、もちろん最初のきっかけはパートナーの後押しですが、パイオニアたちの存在がとても大きいです。パートナーの妊娠中、父親支援事業を行っているNPO団体が書いた『パパ入門ガイド』という本を図書館で見つけて読んでみたのですが、とても有益な情報ばかりで、その団体の他の活動にも次第に興味が湧いてきました。団体では父親の育休取得を推進する活動も行っており、会員の中には、職場が育休取得に消極的だけど交渉を重ねて育休を取得した方や、非正規雇用だけど育休を勝ち取った方もいました。彼らの奮闘を知ったとき、恵まれた環境にいる僕こそが動かなきゃだめだ、と更にもう一歩踏み出す勇気をもらえたんです。

当初は彼らのようなパイオニアたちの努力を無駄にしたくないという思いが強くありました。しかし今では、育休を取得していなければ、ここまで子どもと距離が近くなることはなかったと実感しています。また、現在パートナーと分担して育児をスムーズに行えているのは、二人で同時に育休を取っていた期間があるからだと思います。

ここまでずっと「育休」という言葉を使ってきましたが、育休期間を終えてからこの言葉に対して非常にモヤモヤしたものを感じるようになりました。育児をしていたら一日があっという間に終わってしまうし、空腹でもないのに訳も分からず何かを食べ続けてしまう時期もありました。精神的にも体力的にも摩耗した状態が続くんです。決して「休み」という言葉は当てはまりませんよね。「育業」に言い換えるなど、今後議論が進んでいってほしいと思います。

子どもを持つという選択肢すらも制限されてしまう今の社会を急に変えていくことは難しいです。また、全ての男性用の公共トイレにオムツ台を設置するなど、設備面を変えていくことも時間がかかるはずです。でも、誰かが踏み出さなければ社会は変わっていきません。そして、先に何かを変える努力をしてくれたパイオニアたちの苦労を僕は無駄にしたくない。僕たちが彼らに追随（ついずい）して踏み出していくことが、第一歩だと思うのです。

［取材　沼田仁子／取材・文　秋山茉莉奈］

ヒューマンあい　だより

●男女平等推進団体の登録・更新について

男女平等社会の実現に向けて活動している市内団体を「男女平等推進団体」として登録しています。団体登録をすると、会議室の優先利用や印刷機の利用、補助金などの活動支援を受けることができます。詳細はホームページをご覧ください。

TOPICs

ホームページなどで情報発信しています

男女平等推進センター「ヒューマンあい」の取り組みを、ホームページなどで情報発信しています。アクセスしてみてください。

ホームページ　『まなこ』バックナンバー

講座レポート

●しっかり学んで家族で話そう「思春期男子のカラダとココロ」

日時＞令和４年８月６日（土）13:30～15:30

場所＞武蔵野プレイス４階フォーラム

講師＞大田静香さん
（武蔵野市助産師会会長、むさしのレディースクリニック助産師）

思春期の男子に起こる変化、性の話、今の子ども達の現状、自分も相手も大切にする等、思春期の男子の保護者に向けた講座を実施しました。

女性に対する暴力をなくす運動

毎年 11月12日から 25日は「女性に対する暴力をなくす運動」期間です。

暴力は、その対象の性別や加害者、被害者の間柄を問わず、決して許されるものではありません。国や自治体、その他関係機関では、連携・協力して「女性に対する暴力」の根絶に向け、さまざまな取り組みを行う運動期間を設け、女性の人権尊重のための意識啓発の充実を図ることを目的としています。

◎パープルリボン

紫色のリボンを身に着けることによって、「暴力のない世界にしたい」「暴力を許さない」という気持ちを表すとともに、暴力の被害者へ味方がいることを伝えています

相談窓口のご案内　相談無料　秘密厳守

◆女性総合相談

女性が暮らしの中で抱える様々な悩みについて、女性の専門相談員がお話を伺い、解決に向けて一緒に考えます。夫やパートナーとのこと、家族のこと、職場や学校でのことなど、どんな些細なことでもかまいません。誰かに話すことで、気持ちが楽になることもあります。お気軽にご相談ください。

【相談方法】面接・電話による相談
【相談時間】1回50分／予約制

第１土曜日	①13:00～　②14:00～　③15:00～
第２金曜日	①18:00～　②19:00～
第３月曜日	①14:00～　②15:00～
第４火曜日	①　9:00～　②10:00～　③11:00～

◆女性法律相談

離婚・扶養（養育）・相続などの法律的な対応や手続きについて、女性弁護士が相談に応じます。

【相談方法】面接による相談
【相談時間】1回30分／予約制

第１土曜日	①9:30～　②10:10～　③10:50～　④11:30～

【申込み方法】「ヒューマンあい」窓口または、電話にて予約を受け付けます。
【予約電話番号】0422-37-3410（木曜・年末年始を除く午前９時～午後10時）

◆むさしのにじいろ相談（性的指向・性自認に関する相談）

セクシュアリティ全般や性的指向・性自認に関する悩み・相談に専門相談員が応じます。ご本人のみならず、ご家族や支援者の方などからの相談にも応じます。一人で悩まず、まずご相談ください。

第２水曜日	17:30～20:30

▶**電話相談**：0422-38-5187　※予約不要
▶**面談をご希望の方はこちらへご予約ください。**
0422-37-3410

BOOKS

男女平等推進センターの蔵書から　貸し出しています！

『女の子はどう生きるか ―教えて、上野先生！』

上野千鶴子 著　（岩波ジュニア新書）

「女の子って損!?」学校、家庭、社会の中で、10代の女の子たちが抱く性差に関する疑問に著者が答える。歯に衣着せぬ語り口は、誰もが自分らしく生きるための知恵と勇気を与えてくれる。

女の子だけでなく、男の子や大人が読んでも面白い内容。ジェンダーギャップ指数の低い日本社会の課題に目を向けるきっかけをくれる一冊。

［文　沼田仁子］

武蔵野市立男女平等推進センター「ヒューマンあい」ご利用案内
〒180-0022　武蔵野市境２-３-７　市民会館１階　　開館時間：午前９時～午後10時（木曜・年末年始 休館）
電話：0422-37-3410　　FAX：0422-38-6239　　Eメール：danjo@city.musashino.lg.jp

まなこ NOV 2022 115
生き方・いろいろ・ゆたかな人生～男女平等推進fromむさしの『まなこ』第115号
企画・発行：武蔵野市 市民部 市民活動推進課 男女平等推進センター 2022年11月発行 〒180-0022 東京都武蔵野市境2-3-7 TEL：0422-37-3410

『まなこ』は文字通り「眼（まなこ）」。人やまちや文化や地球を、男女平等推進の視点＝「まなこ」で見ていこう！という思いで名付けられました。1991年創刊以来、市民が企画・編集にかかわっています。

令和4年度 第2回『まなこ』サポーター会議

114号『見た目って大事？社会の中のルッキズム』を読んで

令和4年度 第2回『まなこ』サポーター会議が7月13日（水）にスイングビル スカイルームにて開催され、活発な意見交換がされました。

◎有識者の話は学術的で整理されており、ルッキズムの問題が良く分かった。社会学の観点からも丁寧に説明されていた。後半の吉野さんの事例はとても読みやすく、若い世代にも共感してもらえるのではないか。

◎同じテーマを取り上げる機会を持ち、大人や子どもの座談会があると良いと思った。

◎見た目を気にしちゃいけないのは昔から分かっていること。有識者の話で、無意識に見た目を比べてしまうことの問題点に気づけた。

◎自分では変えられない見た目についてもルッキズムの問題のひとつだと思う。一人を深く掘り下げるより、何人かの具体例があると良かった。

◎「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」の資料がすごく気づきを与えてくれ、ルッキズムを理解する手助けになった。

◎「見た目の違い」に対して特に敏感になってしまうのは、日本社会にある「みんな同じであること」という保守的な思いからではないかと考えた。

［文 羽柴吏美］

『まなこ』サポーターの200字コラム supporter's 200 words

「男らしさ」「自分らしさ」について

「○○らしさ」って難しい　森田あゆみ

姉妹で育ってきた私にとって、父が男らしい人だと思っていた。父はずーっと昔から口癖のように「あ～、仕事に行きたくないなぁ」と言いながら出勤していた。私は「がんばってね～」と笑って見送っていた。家族のために働く父が、当たり前だと思っていた。今なら男性の生きづらさも想像できる。

改めて「男らしさ」とは何かと考えれば考えるほど、よく分からなくなってきた。難しい。もっと男性側の考えを聞いてみたい。

「明日の私」らしく　山本文美子

「自分らしさ」ですら、つかみきれていない私。ましてや人から「○○らしく」なんて言われると戸惑ってしまう。みんなの頭の中にあって、でも実は人それぞれの思いの「らしさ」。成長しながら私の「自分らしさ」はきっと変わってきた。「男らしさ」も「女らしさ」も時代とともに変わっていい。そのうちそんな言葉はなくなってしまうかもしれないよ。だから今は、そういうものだと思って、するりとかわしていきたいな。

男性にとっての「男女平等」へ　渡辺桜子

２０１４年の国連でのスピーチ、"HeForShe"の中でエマ・ワトソンは、フェミニズムにおける女性の権利主張はネガティブに捉えられがちだが、本来は男女かかわりなく人間の平等を目指すものであると述べ、男女ともに「弱くある自由」を訴えた。

ところで、日本におけるうつ病の罹患率は、女性が男性の2倍だが、自殺者は男性が女性の2倍である。真の意味での男女平等は、男性も弱さを見せられる、男らしさからの解放にあるのかもしれない。

Editors' Notes ＊ 編集後記

「子どもを持つ」という選択をしたと同時に社会全体のことを考え続けている清水さんへのインタビューはとても印象深かった。パートナーと連帯して地域と繋がる。本当に素敵な「自分らしさ」だ。（秋山茉莉奈）

息子が不登校だった高校時代、悩んでいる気持ちをノートに書きなぐれば、と話した。それは難しいとカウンセラーに言われたが清田さんの話で合点がいった。（島崎理恵）

男らしさの固定概念にとらわれていることに気づかされた特集でした。性別に関わらず、自分らしく生きればいい、そう思える3人の話に共感しました。（沼田仁子）

男性はこうあるべきという社会通念は根強く存在する。時代や他者から無意識に貼られたレッテルを少しずつ剥がし、自分らしい男らしさを見つけて欲しい。（羽柴吏美）

清田さんの講座で、男性は感情の言語化が苦手だと聞いた。幼少期の「男の子だから泣いちゃダメ」の影響か。育て方、ジェンダー意識が変化しているこれからに期待。（久富明美）

今回は男性特集。自分らしさを大切にする3人の男性が登場します。取材の対象も編集委員も女性に偏りがちな本誌ですが、新しい読者が増えたらうれしいです。（藤田和香子）

無意識に息子に「男らしさ」を押し付けてないだろうか、と改めて考えさせられる特集だった。「自分らしさ」を大切に、自由に生きていってほしいと願う。（若林優香）

＊STAFF＊

サポーター　鈴木 章　柄目 茜　塚脇未来子　中村邦子
宮代エリサ　森田あゆみ　山本文美子　渡辺桜子
取材・編集　秋山茉莉奈　島崎理恵　沼田仁子　羽柴吏美
久富明美　藤田和香子　若林優香
武蔵野市男女平等推進センター担当職員
編集協力　栗原 毅
表紙デザイン　ふじわらりわ
レイアウト　上田ジュンコ
印　　刷　シンソー印刷株式会社

『まなこ』は市役所、市政センター、図書館、コミュニティセンター、駅、医療機関、理美容院、大型店舗、金融機関、おふろやさんなど市内の約490か所に置いてあります。バックナンバーをご希望の方は、男女平等推進センター「ヒューマンあい」まで。
＊配布は、公益社団法人武蔵野市シルバー人材センターのご協力を頂いております

市ホームページでもバックナンバーをご覧いただけます。
武蔵野市 まなこ 検索

◎綴じ込み返信はがきで、ご意見やご感想をお寄せください。次号は、令和５年３月発行予定です。